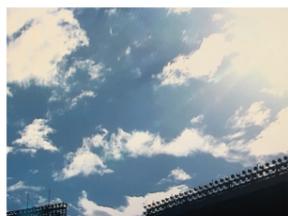


# Gの政治考

2018.8.28

## 吉田輝星と根尾昂

史上最も暑くなった平成最後の夏、鮮烈な印象を残した2人の高校生について、書き記しておきたい。吉田輝星と根尾昂。近い将来に松坂大輔や坂本勇人を凌ぐ野球選手として大成するだろう。しかし、それ以上に特筆すべきは、対極にある環境で育ち、全く異なるキャリアを歩んできたことで培われた、2人の独特な魅力にあると思っている。



吉田輝星投手は、この夏の甲子園で主役に踊り出るまで、中学・高校を通じて一度も全国大会に出場した経験がない。それこそが、U18日本代表候補に選ばれていたものの、大会前にメディアの注目を浴びる存在ではなかった理由であり、近年野球界で台頭してきたとは言え全国的に無名に近い、八戸学院大学への進学が内定していた理由でもあると思う。

秋田県予選の初戦で、金足農業は、秋田北鷹という実績の乏しい公立高に2-0で苦戦しているが、もしも甲子園の舞台を踏んでいなかったらどうなっていたかを想像すると、本人はもちろん、野球界や秋田県にとっても、貴重なチャンスを逃さないでくれて本当に良かったと思う。

吉田君が生まれ育った秋田県は、全

国で最も速いスピードで人口の減少と高齢化が進み、すでに100万人を切った人口が2045年には60万人に縮小すると予測されている。その根本的な理由は、東京をはじめ大都市圏との情報や機会の格差が広がり、若い世代のチャンスと選択肢がますます狭まっていることにある。

これはもちろん、秋田県に限った問題ではなく、国民の6割が暮らす非大都市圏=地方に共通する。だからこそ、大勢の人たちが金足農業に自分の境遇を重ね合わせて喝采を送ったのだと思う。情報や機会の格差が開いても、吉田君のような才能が育つ場所であることに希望を感じたのだと思う。

観る人たちの心を鷲掴みにした吉田君の本当の魅力は、どこにあったのか。僕が何より魅きつけられたのは、江川卓を彷彿とさせる速球の威力以上に、マウンドで見せる落ち着きと仲間に対する大らかさだった。

準々決勝の対近江高校戦、1点リードされて迎えた最終回。無死1、2塁のピンチを当然のように球速のギアを上げて三振で切り抜ける。すると、攻撃に入る直前のベンチで、吉田君は、打席に備えて緊張気味な表情を浮かべる仲間の肩に腕を回して何やら楽しげに話しかけていた。土壇場でこういう振る舞いができるんだな、と感心した。その後、金足農業は無死満塁から意表を突いたツーランスクイズでサヨナラ勝ちしたわけだが、スクイズを決めたのは、そこまで9打数ノーヒット、吉田君に声をかけられていた9番打者だった。「ノーヒットやけど、ここでお前が決めるんだぞ」と励まされたという。

大本命・大阪桐蔭との決勝は、矢折れ力尽きた形になったが、大差のついた最終回のベンチで、吉田君は、仲間と一緒に嬉しそうに声を出して打球の行方を追っていた。見ている側が幸せな気分になった。大谷翔平とも重なる、こうした資質を備えた若者を大勢育てることこそ、地方が為すべき役割だと思った。

根尾昂選手について割く紙幅が少なくなりましたが、僕の知る限り、根尾君のような野球選手は日本に存在しなかった。これまでも勉強に秀でてプロ野球へ進んだ選手は存在したが、大阪桐蔭というトップクラスの野球高校で文武両道を貫いてきたと評価され、プロとして超一流になった選手は、聞いたことがない。

打者としては3割30本30盗塁、守備は難易度が最も高いショートでゴールデングラブ賞、その両方を達成するプレーヤーになると思う。頭脳の方は想像の域を出ないが、周囲の評判やメディアとの受け応えで垣間見る理路整然とした話ぶりには、将来は日本の野球界・スポーツ界を牽引するポジションに立つだろう、そうなってもらいたいと感じさせるところがある。

日本で最も厳しい状況に置かれる秋田県で地元の野球仲間と共に大器に磨きかけた吉田輝星。かたや、最高の人材と指導理論が揃った環境の下で英才教育を受けて無限の可能性を予感させる根尾昂。ポスト平成の時代に地方と大都市それぞれで目標となる理想の若者像として、これから2人が野球の枠を超えて成長していく姿を見つめていきたい。

臥雲の会 事務局  
〒390-0811  
長野県松本市中央1丁目2-24  
電話 0263-36-7343  
Fax 0263-50-6727  
E-mail info@gaun-y.com



Gの政治考は  
公式サイトで更新中です。  
<http://gaun-yoshinao.com/>

2018  
10

vol.9

Lの視点で、Gの時代を穿つ

# G通信

臥雲義尚 × リポート

臥雲は日々何を考え、活動しているのか。  
その横顔と頭の中を覗けるニュースレターです。

## 奈川と松本城から、都市計画をつくる

松本市の面積は、978平方キロメートル。全国に800近くある市で20番目の広さです。平成の大合併以前と比べると、3倍以上に広がりました。行政サービスを持続・充実していくという観点から見れば、人口が減少する時代に面積が広いことは、必ずしも恵まれているとは言えません。

松本市の南西の端に位置して木曾谷と境を接する奈川地区(旧奈川村)は、合併から13年あまりで人口が3割減って700人を切りました。ただ一つの学校である奈川小中学校の児童・生徒は、わずか33人で、中学に進む段階で子どもの教育を考えて引越すことが普通になってきているといいます。

松本市の中心、松本城の周辺では、「新博物館の建設」と「市庁舎の建て替え」という大型事業が、必然性や費用対効果を幅広い市民に十分に説明することなく進められてきました。ところが、現市長が10年来の「外堀の復元事業」を取り止める方針を決めたことで、再検討を求める声が広がっています。

都心から郊外へ無秩序に開発が拡大する「スプーロール化」が進んできたことは、松本市も例外ではありません。その結果、町会組織が空洞化する地域が増える一方で、一部の小中学校に子どもが偏在する状況も生まれています。人口の減少を見据えれば、都市のバランスを回復することは急務です。

いま世界に目を向けると、アマゾン筆頭とするテクノロジー企業があらゆる産業を席卷し、私たちの生活は劇的に変わろうとしています。小売りも、物流も、決済も、働き方も、10年後には、距離や時間を超越する新たなスタイルが出現しているはずです。それを先取りする構想が必要とされています。

松本市の広さを、ハンデキャップでなくアドバンテージに変えていく、多様性の魅力に変えていく。そのための新たな都市計画をつくる時期が来ていると考えます。集積と分散、歴史的な重みと最先端のテクノロジー。30年先の未来へ繋がる街づくりに、皆さんと一緒に取り組みたいと思います。

### 編集後記

平成の終わりに、「オーラルヒストリー」という言葉と出会う。当事者がいなくなれば、二度と復元できない史実を記録することの意義。これから進むべき道を定めるとき、現地を確認するため、私たちが辿った道を振り返ることが大切であることを学んだ。「9.9クロストーク」は、多くの皆様のご協力、実りある会にすることができました。ご協力ありがとうございました。(くり)

臥雲義尚

“私は、ゴールより、スタートを切っていたい”  
『半分、青い。』より

日々更新中 /

## 臥雲の日常と横顔



Facebook



### 7月~10月 主な投稿記事

- 7/11 小林世代、最後の夏初戦敗退
- 7/14 政治風刺劇「ザ・空気2」を鑑賞
- 7/18 空き店舗で若手俳優集団公演
- 7/24 子どもで賑わう小池町舞台曳き
- 8/3 岡山の豪雨水害被災地を視察 a
- 8/9 総文祭に特別支援学校部門も b
- 8/25 マスターズ甲子園予選に出場
- 8/26 乗鞍の自転車レースで給水係 c
- 9/4 2021年に中核市移行の方針
- 9/19 市民病院移転は白紙の公算大 d
- 9/23 アルウィン観戦で山雅が快勝
- 10/3 人口3割減の奈川地区を訪問 e
- 10/6 源池小学校の「防災キャンプ」
- 10/10 浅間温泉で空き家の実態調査
- 10/14 為末大さんに“部活”を聴く



a

岡山県真備町に来ています。JR伯備線の清音という駅で下車し、2つの河川に挟まれて浸水被害に遭った一帯を、自転車で3時間余りかけて見て回りました。もうすぐ豪雨から1か月が経とうとしていますが、店舗や家屋から運び出されたゴミや廃材が堤防や道路の脇に積み上げられ、ほとんどの商店や工場は、洪水の傷痕を残して営業再開に程遠い状況です。この豪雨災害から汲み取るべき教訓は何か。時間をかけて考えてみたいと思います。



b

全長20.5km、標高差1260m、ゴール地点の標高が2710m。天空に向かって走る山岳自転車レース「マウンテンサイクリングin乗鞍」の魅力が堪能してきました。コース全体の4分の3地点に設置された給水所で、トップグループのスピードに驚愕し、颯爽と走り抜ける女性たちに目を奪われ、必死でペダルを漕ぐ太目のサイクリストに感情移入し、時間を忘れて紙コップを手渡していました。生半可な覚悟では絶対に走り切れないことをわかりつつ、自分も走ってみたいという誘惑に駆られてしまうくらい、みな輝いて見えました。



c



d

松本市に編入してから13年余りで人口が30%減少した奈川地区を訪ねる。通学向け公共交通の利便性向上、インターネットのブロードバンド化など、切実な要望を聞く。<美しき山村>に子どもや現役世代が住み続けるためには何をすべきか、問い直していきたい。



e

### 広がる、地区別組織の動き

7月31日、猛暑の中、24名の地区幹事の皆さんにお集まりいただき、第2回となる地区幹事会を開催しました。活動報告会と懇親会に分けて、各地区の取り組みやご意見を頂戴し、よい意見交換の機会になりました。複数名の幹事が参加する地区、組織の取り組みが本格化した地区、活動は広がりを見せています。今後は、地域に向いて、それぞれの課題を掘り下げる「地区版ジセダイトーク」なども展開していきたいと思ひます。



### 特別企画

## ジセダイと語る 松本のプライド

クロストーク

### 9/9 御厨貴 みくりやたかし × 臥雲義尚 がうんよしなお 「時代の聴者が語る、これからの日本と松本」 ～平成が生み出した『一強体制』と『地方自立』～

下り坂にどう向き合っていくのか試行錯誤が続いた、平成の時代が終わろうとする今だからこそ、ぜひ、政治と未来と松本について掘り下げて考えるイベントを開催したいと思いました。

対談の相手をお願いしたのは、「オーラルヒストリー」の第一人者である政治学者の御厨貴さん。日曜の夜にもかかわらず、およそ300人の皆さんに足を運んでいただきました。

戦後ニッポンの頂点とグローバル化の到来でスタートした時代が、どのような経緯を辿って「一強体制」に行き着いたのか。今上天皇、小沢一郎、野中広務、小泉純一郎、安倍晋三、5人のリーダーの実像と真意に迫りながら、この30年を振り返りました。

その上で、人口が減って「地方自立」を余儀なくされるポスト平成の時代に、松本はどうあるべきか。東京への更なる一極集中、気候変動や自然災害の多発、ミレニアル世代の価値観といった視点を織り込んで、未来の松本に関する所見を述べさせていただきました。

忙しい時間を縫って今回の対談を引き受けていただいた御厨さんに心から感謝し、これからも「多事争論」していきたいと思ひます。

<本人執筆>



<御厨貴氏プロフィール>  
政治学者。専門は近代日本政治史。現在、東京大学名誉教授、同大先端科学技術研究センター客員教授。天皇公務の負担軽減等に関する有識者会議座長代理。今年9月まで、TBSテレビの政治討論番組「時事放談」キャスターとしても活躍。



### 参加者アンケートより

アンケートをお願いしたところ、回収率は60%、179人の方から回答をいただきました。参加者の男女比は7対3。年齢層は全体が高く、10代から30代の「ミレニアル世代」の参加はわずかでしたが、彼らから積極的な提案もあり、未来への希望も感じました。如何に幅広く情報を届けていくのが課題です。

皆さんからたくさんの感想もいただきました。その一部をご紹介します。

「元号は歴史を遮断できる。(西暦にはできない)という冒頭の話が印象的だった。平成の30年を近現代政治史全体の中で改めて俯瞰することができた。理念的な話から、終盤の市役所やエネルギーなどの具体的な話まで、学びも多く考えることも多い2時間でした。」(30代男性)

もっと若い人達が戻ってくる地域づくりを考えていかなければと強く思っていたのですが、今日のお話の中で、「幸福感の持てる街」ということが出てきて、それをみんなで考えていけることが、とてもうれしくなりました。今後、20年、30年先の松本は、若い人たちも一緒に考えていかなければ…」(60代女性)